

巨額の経常収支赤字が縮小に転じることは、経常収支の反転と呼ばれている。この分野における実証研究では、経常収支の反転に影響する要因として、(1) 内需（あるいは GDP）の減少、(2) 交易条件の改善、(3) 自国通貨の減価、などが指摘されてきた。しかしながら、本研究は、高齢化も経常収支の反転に影響する重要な要因であることを示す。

本研究は、アメリカ経常収支と外国平均余命の長期均衡関係が 2000 年代前半に反転したことを示す。外国平均余命の上昇は、2000 年代前半まではアメリカの経常収支赤字の拡大要因であったが、その後は縮小要因である。外国としてアメリカを除く G7 のデータを使用した。アメリカとその他 6 カ国の平均余命の差は広がり続けている。そのため、本研究の実証分析は、他の条件を一定とすれば、外国の高齢化がより急速に進むプロセスにおいて、自国の経常収支赤字は最初に拡大するが、その後は縮小することを示唆している。

以上の実証分析の結果を理論的に解釈するために、高齢労働者を追加したシンプルな 2 国 1 財 2 期間の世代重複モデルを使用する。そして、自国の経常収支と外国の高齢者生存率（平均余命）の関係が U 字型曲線で描写される。その背景は、以下の通りである。

- (1) 外国生存率が上昇する初期段階では、外国家計は引退後のために貯蓄率を上昇させ、資本蓄積が促される。外国から自国への資本フローが増大して、自国の経常収支赤字が増大する。
- (2) 外国の高齢化が十分に進むと、社会保障制度を維持するために外国の税率が上昇する。これにより、外国の資本蓄積が阻害される。外国から自国への資本フローが減少するため、自国の経常収支赤字は減少する。
- (3) 平均余命の上昇に伴い高齢労働者の生産性が上昇すると仮定すると、高齢化は資本労働比率を直接低下させて、金利に上昇圧力を与える。外国の高齢化が十分に進むと外国金利は上昇し始めて、外国から自国への資本フローが減少する。その結果、自国の経常収支赤字は縮小する。

この U 字型曲線という結果は、外国の高齢化がより急速に進む場合、外国の高齢化が自国の経常収支に与える影響がマイナスからプラスに転じることを示唆している。したがって、上述した実証分析の結果は理論的に支持される。

更に、退職政策が経常収支に与える影響についても分析する。退職年齢の延長は高齢労働者の労働参加率を上昇させるため、上述した 3 番目の効果は退職年齢の延長により増幅される。このことから、退職年齢が高い国ほど、高齢化による経常収支の反転は早期に生じることが示される。したがって、高齢化対策として退職年齢を引き上げると、外国平均余命が自国経常収支に与える影響はマイナスからプラスに転じやすくなると推測される。